

# 手指 さまざまな表情

村山正則



指の形いろいろ (カット・筆者)

手の素描を試みつゝ、じつと手を見る。

外科医は手を大切に、殊に指を傷つけることは厳に避けねばならぬ……。

若き日、外科教室に入局時、先輩から聞かされた教訓であ

つた。

じつと手を見る——で想い起こすのは石川啄木の詩——

働くけど働くけど なおわが暮し 楽にならざり

じつと手を見る

啄木の見た手は手掌か手背か、はたまた指であつたろうか。じつと見ていると絵になる素材ではある。手背、手掌、指の夫々に個性、表情がある。

「拇指」を立てればOKのサインであり、「男性」を意味する。親指と称されるだけに、他の四指を含め、手、前腕に対して指揮官的存在。男性的であり支配者然としている。——にも拘らず、最近はケイタイと称する不粋な器具の専用語になり下がつた姿を見るにつけ、「親指」の威厳も地に落ちた感あり……と思うのは、ボクだけか——。

「小指」はみたゞけで女性を表現している。児童の指切り約束の主役でもある。かつて、「小指の想い出」という流行歌があつた。——“あなたが嘔んだ 小指が痛い……小指だから甘い詩になる。他の指ではこの雰囲気は出まい。

「示指」は文字通り人指し指。微妙で正確な働きをする。ITに弱いボクにはパソコンボタンを押してくれる唯一の指。詩人の萩原朔太郎はこの指を「おすましで意地悪」な指と表

現している。向田邦子の隨筆集に「女人人指し指」というのがある。題名の作品は見当たらないが作者の気持ちも何か判るような気もする。

「中指」は五指の中で最長だけに、親指を除く四指の長男的  
存在であろうか。長身だけに力も強く、拳骨の主役にはなる。  
殊に囲碁、将棋の盤上での表情は知性的で中指ならではの自

つての女性によくみられた働く指の美学は、すでに過去のものとなつた。

江戸時代の浮世絵にみられる女性の指の美しさ。伸びた爪のみられないのが却つてあでやかさを見せている。それを思うと今日の女性の整いすぎた美しい指は、むしろ無表情ではある。



信を見せるのがこの指であろう。

「環指」は字の如く指輪専用か、指の中で最も運動能力の弱い指ではある。子供の頃、大人の女性が唇に紅をつける時、この指を使つているのをよく見かけた記憶がある。女性には、こういうところにこの指の使い易さがあつたのであらうか。

——ところで、女性の派手なマニキュアを見るにつけ、か

顔の筋肉、表情は、思考感情をそのまま表現する反面、偽装することも出来るが、手指の表情は心で思うまゝに反応する素直な表情は、正直な器官ではなかろうか。

人の喜怒哀楽に無意識に動いている手と指。八十年の人生を共に過ごしてきたわが手指を見つめながら、その表情を描いてみる楽しみのこの頃である。

# 知之者不如好之者 好之者不如樂之者

## 豊 泉 清

戦前の高等教育を受けた先輩から手書きのお手紙を受け取ることがある。私は若い頃から習慣的に仮名文字だけで書いていた「恰も、嘗て、寧ろ、概ね、悉く、殆ど、凡そ」などという短い言葉も片端から漢字で書いてある。戦前の漢字教育は桁違いに徹底していたなど驚嘆させられる。私は戦後教育を受けて、略字体の常用漢字しか教わらなかつたから、漢字に弱い世代に属している。雑文を綴る趣味の持ち主だが、漢字の知識が乏しいという劣等感に苛(さいな)まれており、僅か数行の文章を書くにも、何種類もの辞典を引っ張り出して漢字の確認をしている。漢字の知識は零点だが、辞典を繙いて新たに覚えた漢字を雑記帳に手まめにメモしておく習慣だけは百点満点だと自負している。

**Keine Regel ohne Ausnahme** (例外のない規則はない) というドイツ語の格言を習つたことがある。規則を設ければ必

ず例外を伴うのが世の常である。日本語の漢字の読み方も例外だらけだと常々感じている。「い」の漢字に、こんな読み方もあつたのか」とか「この言葉に、こんな漢字表記もあつたのか」と、古希を過ぎてから初めて知つて驚くことがしばしばある。そこで雑記帳の中から興味深い話題を拾い出して披露してみたい。

### 雑魚の魚交じり

漢字には音読みと訓読みがあり、どちらで読むか決つている慣用句が多い。先ず音読みにする言葉を挙げてみよう。頭(ず)が高い 野(や)に下る 左(さ)の通り 我(が)を通す 斜(しゃ)に構える 真(しん)に迫る 根(こん)をつめる 類(るい)を見ない 但し、我(われ)を忘れるや、真に迫ると、真(ま)に受けるや、類を見ないと、類(たぐい)希なや、根をつめると、根(ね)に持つなど、同じ漢字を訓読みにする慣用表現もある。

次に訓読みにする言葉を挙げてみよう。

潔白の証(あかし) 不逞の輩(やから) 貞婦の鑑(かがみ) 飛驒の匠(たくみ) 次のような件(くだり) 驚愕(まな)の眼(まな) 蓮の台(うてな) 悲しき性(さが)す術(すべ) 要(かなめ)の部分 齡(よわい)を重ねる

踵（きびす）を接する 面（おもて）を伏せる 雅（みやび）の心 万（よろず）承る 責（せ）めを負う 脣（ほぞ）を噛む 質（たち）が悪い

質（たち）が悪いは人の性格を指すが、質（しつ）ガ悪いと読めば品物を指す。また「よつて件の如し」の場合は、件を「くだり」ではなく「くだん」と読み慣わしている。

私は「おかめはちもく」を最初に「岡目八目」と書つたが、正しくは「傍目八目」と書く。岡目は単なる宛字である。傍目は傍観者を指すから、意味から判断して傍目と書く方が理に適つてゐる。昔は他人の愛人を密かに慕うことを傍惚れ（おかぼれ）と言い、仲の良い男女を妬くことを傍妬き（おかやき）と言つた。やはり傍を「おか」と読む。また「かたわらいたい」を「傍ら痛い」と書く。「かたわら」を「かたはら」と読み間違えたのか「片腹痛い」と書く人もいる。傍杖を「そばづえ」と読み、傍迷惑を「はためいわく」と読む。傍の音読みは傍若無人などの「ぼう」だけだが、訓読みは「おか」「そば」「はた」「かたわら」の四通りもある。

初産（ういざん）や初孫（ういまご）を、昨今は「しょさん」や「はつま」と読む人が多數派になり、「ういざん」や「ういま」と読む。月初めや年度初めは「はじめ」と読み、書初めや出初め式は「そめ」と読み、初夢や初荷は「はつ」と

読む。初の音読みは「しょ」だけだが、「はじめ」「はつ」「そめ」「うい」という四通りの訓読みがある。漢字は音読みよりも訓読みの方が遙かに複雑だと常々感じてゐる。

何通りもの訓読みがある漢字でも、送り仮名の違いで読み方の見当が付く場合が多い。例えば集には、集（あつ）まる、集（つど）う、集（すだ）く、集（たか）るという四通りの訓読みがある。叢に「すぐく」虫の声や、食べ物に「たかる」蝶なども集の字を書く。また燻には燻（いぶ）す、燻（くすぐぶ）る、燻（くゆ）らすという三通りの訓読みがあり、萎には萎（な）える、萎（しほ）む、萎（しな）びるという三通りの訓読みがある。

魚という字には、「ぎょ」という音読みと、「うお」と「さかな」という二通りの訓読みがある。見出しの「雑魚の魚交じり」を「ざい」のととまじり」と読む。小人物が分不相応に大人物に混じつてゐる譬えである。雑魚を「ざい」と読み、魚を「とと」と読む。

「かまとと」という言葉は「蒲鉾もおととかしら」と質問した人に由来するという通俗語源説がある。知つてゐる癖に、わざと知らない振りをする譬えである。蒲鉾（かまぼこ）は魚の擂身を蒸して作つた食品である。つまり蒲鉾の原料は魚である。かまととの「かま」は蒲鉾の蒲で「とと」が魚だから、かまととを漢字で「蒲魚」と書く。魚に「うお」と「さ

かな」の他に「とと」という訓読みもあることを初めて知った。余談だが、魚籠（びく）、松魚（かつお）、公魚（わかさぎ）、柳葉魚（ししやも）など、魚の字を含む宛字表記がいくつもある。複数の訓読みがある漢字を集め、短い例文と併せて一覧表を作つておけば、文章を綴る際に大いに参考になると思われる。

余談だが、同じ一字から成る漢字語でも読み方が異なる場合がある。勉学一途（いちば）と堕落の一途（いつと）や、追従（ついじゅう）外交と追従（ついしょう）笑いや、有為（うい）変転と有為（ゆうい）な青年や、百聞は一見（いつけん）に如かずと一見（いちげん）の客や、一端（いつたん）を担うと一端（いつぱし）の青年や、末期（まつき）の癌と末期（まつご）の水や入魂（にゅうこん）の大作と入魂（じつこん）の間柄などである。親しい間柄という意味の入魂（じつこん）には昵懃（ひきん）という難しい漢字表記もある。長崎名物の卓袱料理を「しつぽく料理」と読み、丈の低い円形の食卓を指す卓袱台を「ちやぶ台」と読む。「しつぽく」と「ちやぶ」が同じ漢字である。

漢字には吳音、漢音、唐音の三通りの音読みがあると国語の授業で教わった。吳音と漢音の二通りの音読みが使われている漢字が無数にある。

怪	外	解	会	色	食	直
吳音	け	げ	げ	え	しき	じき
漢音	かい	がい	かい	かい	しょく	しょく
怪物、外國、解決、会社など、日常語の大半は漢音読みだが、怪訝（けげん）、外道（げどう）、解脱（げだつ）、会式（えしき）など、仏教語に由来する言葉には吳音で読む例が多い。やはり仏教語に由来する権化（ごんげ）、殺生（せつしよう）、怨靈（おんりょう）、久遠（くおん）、建立（てんりゆう）、因業（いんぎょう）などという吳音読みは一種独特的の雰囲気が感じられる。景色と異色、断食と絶食、正直と実直など、無数の日常語に吳音読みと漢音読みが混在している。また言語（げ						

んご）は言語道断の中で「ごんご」と、変化（へんか）は妖怪変化の中で「へんげ」と、それぞれ吳音読みに変身する。国語の試験で「げんごどうだん」と仮名を振つて減点された想い出がある。吳音と漢音が混在しているのが、国語の難しい理由の一つである。もし漢字に一字一音という原則が貫かれていれば、国語学習は極めて容易と思われる。

### 湯湯婆

唐音読みは鎌倉時代に禅宗の僧侶が日本に伝えた読み方で例数が極めて少ない。普請（ふしん）、暖簾（のれん）、行脚（あんぎや）、提灯（ちようちん）、蒸籠（せいろう）、剽輕（ひようきん）、暢氣（のんき）、蒲団（ふとん）、外郎（ういろう）、

杏子（あんず）、羊羹（ようかん）、饅頭（まんじゅう）、卷纈（けんちん）などが唐音読みである。

蒲団の蒲が常用漢字ではないので、現在は同じ発音の布で置き換えて布団と書く。炭団や団栗（どんぐり）の「どん」もやはり唐音読みである。中華料理のデザートに出る杏仁豆腐の杏仁を「あんにん」と唐音で読み、漢方薬の成分としては同じ杏仁を漢音で「きょうにん」と読んでいる。

懲羹吹膾という漢語を「羹（あつもの）に懲りて膾（なま）す」を吹くと読み下す。羹は熱い肉料理を意味し、漢音で「こう」と読み、唐音で「かん」と読む。羊羹（ようかん）

という菓子がある。本来は羊肉の熱い料理という意味だった

が、なぜか日本では甘い餡を寒天で固めた菓子を指している。

饅頭の頭も唐音読みである。本来の「ちゅう」が連濁現象で「ぢゅう」となるはずだが、仮名文字表記の規則に従つて現在は「じゅう」と書く。野菜や肉を油で炒めて煮込んだ「けんちん汁」という料理がある。漢字で巻纈汁と書き、纈維や纈細の纈（せん）を唐音で「ちん」と読む。

寒い季節に布団の中で足を暖める湯湯婆（ゆたんぽ）という器具がある。最初の湯を「ゆ」と読み、次の湯を唐音で「たん」と読む。中華料理の湯麵（たんめん）の湯と同じ読み方である。本来の中国語は湯婆（たんぽ）だけで「ゆたんぽ」という器具を意味するから、日本語の「ゆたんぽ」は「湯・

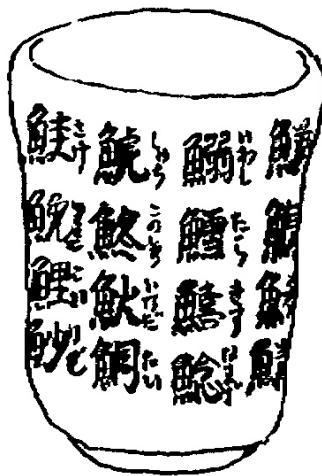
湯婆」と区切つて読める。まるで屋上屋を架すような表現である。

余談だが「屋上屋を架す」は「屋上・屋を架す」と区切つて読む。間・髪を入れず、好事・魔多し、鬼面・人を驚かす、幽明・境を異にするという慣用句を、区切り方を間違えて、間髪（かんぱつ）を入れず、好事魔（こうじま）多し、鬼面人（きめんじん）を驚かす、幽明境（ゆうめいきょう）を異にするなどと弁慶読みにする人もいる。少数派の唐音読みの言葉を集めて一覧表を作ろうと思つてゐる。

### 嬉天下

漢字は中国から伝来したが、漢字の造字法に倣つて日本人も勝手に文字を創案した。いわゆる和製漢字であり、国字とも呼ばれている。その代表例は「働」であろう。人が動いて「はたらく」と解釈できる。日本語の「労働」を中国語では「勞動」と書く。やはり人偏を書く「𠂇」も国字である。人の力で動かす車と解釈できる。やはり人偏に弟と書く「悌」は「おもかげ」と読む国字である。一般的には面影と書く。峠、辻、烟、畠などの地形や、風、凧などの自然現象も国字である。中国語では「はたけ」に相当する農地を「旱田」と書く。旱は日で乾くという意味だから、乾いている田と解釈できる。

日本は海に囲まれていて海産物が豊富だから、日本人は昔から魚に親しんでいる。鰯、鰆、鱈、鯵、鰐、鰓、鰓など、魚偏を書く国字がいくつもある。鰐（しやち）は歯のある鯨の一



種だが、頭が虎で、身体が魚という想像上の怪獣も指す。秋田県の郷土料理に登場する「はたはた」という魚を鰐と書く。

雷が鳴る頃によく獲れるので、魚偏に雷と書くと言われてい

る。栢、櫻、柵、柾など、木偏を書く国字も多い。中国よりも樹木の種類が多いためだろうか。木偏に神を書く神（さかき）や、佛を書く栴（しきみ）という国字もある。神前や仏前に供える木という意味と思われる。佛は仏の旧字体である。

群馬県前橋市に、櫛島（ぬでじま）と読む地名がある。木偏に勝と書く国字である。私が以前使っていた旧式のワープロでは、表示できなかつた特殊な字である。櫛の字を書く地名は全国でここ一ヶ所だけと言われている。

群馬県には昔から「上州名物、媿天下に空つ風」という言葉がある。媿は「かかあ」と読む国字である。女偏に鼻と書くから、鼻息の荒い男勝りの女性と解釈できる。中国語では媿に相当する女性を「女将」と表記している。文字通り女性の将軍である。日本では女将を「おかみ」と読み、温泉旅館や割烹料理の女主人を指している。

遊び心が感じられるユーモラスな国字もある。口偏を書く「嘶」と「咄」を「はなし」と読む。新しく入手した情報を、口に取出して人に喋りたくなるから「はなし」だろうか。やはり口偏を書く「喰」は、口で食べる行為に更に口を添えるから屋上屋を架す類である。木喰上人という歴史上の僧侶の名前に使われている。身に美と書く「羨」を「しつけ」と読む。「しつけ」とは身を美しく保つ訓練と解釈できる。「粧」は麴と同じで「こうじ」と読む。麴黴（こうじかび）の作用で米の表面に花が咲いたように見えるからと説明されている。余談だが、昔は米をメートルと読んで長さの単位として使っており、米偏を書く糀（キロメートル）や耗（ミリメートル）という国字を見たこともある。

毛と少を組み合わせた「筆」という国字を「むしる」と読む。毛を「むしる」とだんだん少なくなると解釈できる。私は「筆」という字を初めて見た時に、毛が少ないから秃(はげ)だなどと早とちりした。

余談だが、私が小学生の頃は物が乏しくて、指より短くなつた鉛筆を「ちびた鉛筆」といつて最後まで大事に使つていた。「ちびる」を漢字で「秃」(ひだら)と書く。秃という漢字に「ちびる」という訓読みがあることを最近初めて知つた。磨り減るという意味である。和製漢字を集めて一覧表を作つてみようと思つていてる。

### 海鼠腸

前の段落で公魚(わかさぎ)や女将(おかみ)という宛字が登場した。漢字の音訓の原則から逸脱した宛字表記が無数にある。私が小学生時代に最初に習つた宛字は七夕と土産だったと思う。南瓜(かぼちゃ)、西瓜(すいか)、糸瓜(へちま)なども早い時期に覚えた。また高校の歴史の授業で、斑鳩(いかるが)、防人(さきもり)、校倉(あぜくら)、飛鳥(あすか)、屯倉(みやけ)、舎人(とねり)などという読み方を教わった。

女を書く宛字には女将の他に、巫女(みこ)、海女(あま)、瞽女(ごぜ)、女形(おやま)、売女(ばいた)、采女(うねめ)、

女衒(ぜげん)、醜女(しこめ)、手弱女(たおやめ)、郎女(いらつめ)、石女(うますぎ)などがある。石女は不妊症の女性を指すから、産まず女(め)という意味かと思われる。

植物では南瓜、西瓜、糸瓜の他に、百合、羊齒、胡桃、山葵、土筆、慈姑、木賊、躑躅、紫陽花、向日葵、公孫樹、無花果、百日紅、蒲公英、万年青、女郎花、玉蜀黍などという宛字を習つたことがある。

海の字を書く海老、海豚、海苔、海栗、海月、海星、海豹、海驥、海象、海鼠などという宛字も習つたことがある。海の豚は「イルカ」だが、河の豚と書けば「フグ」である。「グラゲ」には海月と水母という二通りの、「ウニ」には海栗、海胆、雲丹という三通りの宛字がある。海豹をアザラシ、海驥をアシカ、海象をセイウチと読む。海鼠(なまこ)の内臓の塩辛を海鼠腸(このわた)と読む。宛字読みを集めて一覧表を作つてみたいと思っている。

### 遊牝む

中国から大量の漢字が日本に導入された。官庁や法律の文書には一般庶民の日常会話には無縁の超難解な漢字語が続々と登場する。日本語には大和言葉があるから、日本人は漢字語に同じ意味の大和言葉を当てて読む方法を考え出した。

微笑、嘲笑、狼狽、零落、流離、戦慄などに送り仮名を添

えて、微笑（ほほえ）む、嘲笑（あざわら）う、狼狽（うろた）える、零落（おちぶ）れる、流離（さすら）う、戦慄（わなな）くと読ませる表記法を昔の小説などで目にしたことがある。美味しいや流行るなどは今でも結構見かける。音読みの漢字語はどことなく硬い響きがある。

「くたびれる」を「草臥れる」と書くが、漢和辞典に草臥という漢字語は載っていない。くたびれて草に臥すという日本人的発想であろう。「遊牝む」と書いて「つるむ」と読む。「つるむ」とは動物の牡と牝が交尾することである。「牝と遊ぶ」はユーモア精神を存分に發揮した日本人の最高傑作だと私は評価している。

### お前の所為だ

脈拍や拍手の拍を「はく」と読むが、拍子の拍に限つて「ひょう」と読む。拍子木や拍子抜けなど、拍を「ひょう」と読む言葉は拍子以外に見当たらない。拍子と同様に、情（じよう）、説（せつ）、簡（かん）、糧（りょう）、煩（はん）、読（どく）などの原則的な読み方を、風情（ふぜい）、遊説（ゆうぜい）、料簡（りょうけん）、兵糧（ひょうろう）、煩惱（ほんのう）、句読点（くとうてん）と読ませる言葉もある。この漢字をこう読むのはこの場合だけという型破りな読み方である。余談だが、読経は短く「どきよう」と読み、読本は濁らずに

「どくほん」と読む。読には基本的な「どく」の他に「どく」「どう」「ど」という型破りな読み方がある。  
算盤、紺屋、華奢、数珠、謀叛、滑稽、傾城、由緒、所為なども少々おかしな読み方である。原則通りならば、算盤（さんばん）、紺屋（こんや）、華奢（かしや）、数珠（すうじゆ）、謀叛（ぼうはん）、滑稽（かっけい）、傾城（けいじょう）、由緒（ゆうしょ）、所為（しょい）と読むはずである。

こんな結果になつたのはお前の「所為」だと、日常会話で所為（せい）という言葉をよく口にする。悪い結果が生じた場合に使われる。所為は、為（な）す所と反転して読み下す漢文に由来する。お前の為す所によつてこんな悪い結果が生じたという文脈である。逆に良い結果が生じて相手に感謝する場合は「おかげ」という。型破り読みの言葉を集め、短い例文も添えて一覧表を作つてみたい。

### 垂涎の的・憧憬的

由緒や内緒の緒を「しょ」と読むが、端緒や情緒の緒は「ちよ」という読み方が慣用化している。「ちよ」は「しょ」の誤読という解説が辞書に載つてある。

実は消耗（しょうもう）の耗も誤読の慣用化である。耗は正しくは「こう」と読む。毛の字画に影響されて「もう」と誤つて読むようになつたに違いない。但し法律用語では心神

耗弱を正しく「こうじやく」と読んでいる。また稟議（りんぎ）も誤読の慣用化で、正しくは「ひんぎ」と読む。消耗（しようもう）や稟議（りんぎ）という誤読が完全に定着してしまったので、もはや誤読と認識されない。

糊で貼り付けることを貼付（ちようふ）というが、誤つて「てんぶ」と読む人が多い。似たような動作の添付（てんぶ）からの連想だろうか。簡明直截の直截（ちよくせつ）を誤つて「ちよくさい」と読む人も多い。截（せつ）が載（さい）に酷似しているための誤読と思われる。同じような理由で垂涎（すいせん）の涎（ぜん）が延に似ているために「すいえん」と読み誤り、憧憬（しうけい）の憧（しうう）が童に似ているために「じうけい」と読み誤る人も多い。最近のパソコンは「すいえん」や「じうけい」という誤読でも垂涎や憧憬に変換できる。誤読が慣用化して、もはや誤読と見なされなくなつた結果であろう。「でたらめも皆で読めば恐くない」という風潮が広まっている。

### 貧乏暇なし、枚挙に暇なし

脳裡を過ぎるの「過ぎる」を「よぎる」と読み、手紙を認めるの「認める」を「したためる」と読む。特定の言葉の後で読み方が変わる漢字がいくつもある。弦樂器を指で演奏することを爪弾（び）きと言い、人に嫌われる場合は同じ字を

爪弾（はじ）きと読む。腕は磨（みが）き、米は磨（と）ぐ。ページは捲（めく）り、袖は捲（まく）る。問題は拗（こじ）れ、幼児は拗（す）ねる。草花を愛（め）で、幼児を愛（い）とおしむ。人を煽（おだ）て、大衆を煽（あお）る。人を騙（だま）し、経歴を騙（かた）る。不安に怯（おび）え、相手の剣幕に怯（ひる）む。貧乏暇（ひま）なし、枚挙に暇（いとま）なしである。同じ漢字でも、前の言葉によつて読み方が変わるから国語は難しい。

逆に同じ訓読みだが異なる漢字を当てる例もある。例えば「つとめる」には、勤める、努める、務める、勉めるなどという漢字を書き、「みる」には、見る、視る、観る、看る、診るなどという漢字を当てる。漢字本来の字義によつて、同じ訓読みでも意味が大いに異なる。例えば、司会を「務」めながら、円滑な議事進行に「努」める。また医師が患者を「みる」場合には「診る」と書くことが多い。

### お愛想

飲み屋で勘定を払う時に「おあいそ」という。愛想を素直に読めば「あいそ」だが、「おあいそ」のように、想を「そ」と縮めて読むのが慣例である。通夜、銅鑼、法螺、音頭なども、通（つ）、銅（ど）、法（ほ）、頭（ど）と縮めて読む。逆に女房、披露、団体、富貴、詩歌などは、女（によう）、露（ろ）

う、図（ずう）、富（ふう）、詩（しい）と伸ばして読み、登記や登録の登は「と」

と縮めて読み。

香水の水は「すい」と澄んで読み、洪水の水は「ずい」と濁つて読み。「喧嘩両成敗」の成敗を「せいばい」と濁つて読み。喧嘩した者は両方とも処罰されるという意味である。「成敗は時の運」の成敗は「せいはい」と澄んで読み。成功と失敗という意味である。人道は「じんどう」と濁つて読み、神道は「しんとう」と澄んで読み。医者、芸者、役者、学者は「しや」と澄んで読み、患者、忍者、信者、亡者などの者は「じや」と濁つて読み。猛者（もさ）という変わった読み方もある。

容器、臓器、陶器などの器は「き」と済んで読みが、三種の神器だけは例外的に「じんぎ」と濁つて読み。器を「ぎ」と濁つて読みのは神器くらいである。博学や博識や該博の薄は「はく」と澄んで読みが、賭博や博労の博は「ばく」と濁つて読み。「朝酒を飲んで身上を潰した」という会津民謡の歌詞がある。財産という意味の身上は「しんじょう」と読みが、身上調査や身上書の身上は「しんじょう」と濁つて読み。

漢字の読み方は、伸ばしたり縮めたり、澄んだり濁つたり、変幻自在である。伸縮自在読みや清濁併せ読みの例を更に探してみたいと思っている。

### 臭い忍辱

舌切り雀という童話に「つづら」を背負ったお爺さんが登場する。「つづら」を漢字で「葛籠」と書く。学生時代に「くずかご」と読んで笑われたことがある。葛は秋の七草の「くず」であり、また「つづら」とも読む。つづらとはツヅラフジという植物の略で、その長い蔓（つる）が他の植物に幾重にも絡んで巻き付く。葛籠はツヅラフジの蔓で編んだ籠である。あたかもツヅラフジの蔓のように、くねくねと曲がっている山道を「つづら折り」と形容し、九十九折と書く。九十九（つづら）は折れ曲がる回数が多いことを強調した冗字である。

現在は町村合併で消滅してしまったが、群馬県に九十九と書いて「つくも」と読むむらがあつた。百を古語で「もも」や「も」と言い、九十九は百に次ぐ数だから、次ぐ百（つぐも）だという語言説がある。

お寺の山門で「不許葷酒入山門」と書いた石碑を見かけることがある。「葷酒山門に入るを許さず」と読み下す。葷はネギ、ニラ、ニンニクなど香りの強い野菜を指す。酒やニンニクは仏道修行の妨げになるから寺に持ち込み禁止という意味である。しかし「許さざる葷酒山門に入る」と勝手に読み替えてみたいと思っている。



する僧侶もいたそうである。ニンニクを漢字で「忍辱」と書く。辱（にく）は吳音読みで、辱（じょく）が漢音読みである。忍辱は苦痛

を耐え忍ぶとい

う仏教語で、僧侶  
が余りにも臭い  
ニンニクを我慢  
して食べたから  
……という語源  
説がある。九  
九やニンニクな  
ど、語源の探求  
も漢字学習の一  
助になると私は  
感じている。

裏たけなわ  
漢字は部首で分類する。漢和辞典も全ての漢字を部首に従つて配列している。例えば木偏を書く字を見れば、樹木に関係があるなど凡その見当が付く。「例外のない規則はない」という名言は漢字の部首にも当てはまる。例えば開、閑、間、門、閣などと同様に「聞」と「問」も門構えを書くが、実は

門構えの部首には載っていない。「聞」は耳の、「問」は口の部に属している。字形よりも意味の方を重視し、「聞」は耳が、「問」は口が主役を演じているので、それぞれ耳と口の部首に属している。

学、労、蚩、栄、覚など、カタカタのツの下にカタカナのワを書くような漢字があり、全て同じ部首のよう見えるが、漢和辞典によれば、学は子、労は力、蚩は虫、栄は木、覚は見のように、下半分の字画に従つてそれぞれ別の部首に属している。やはりカタカナのツのよう書き始める嚴や単の旧字体は嚴や單と書いた。最初に口を二つ並べて書くから、口の部に属している。また嘗の旧字体は嘗のように火を二つ書いたので、火の部首に属している。人と漢字は見掛けによらぬものである。

海、湖、池、沼、河などは氵（さんずい）を書く。だから酒も……と思ったら、意外に氵ではなく、酉（さけのとり）という部首に属している。十二支の酉は「とり」と読む。酉は酒の入っている壺を描いた象形文字で、酉だけでも酒を意味する。酔う、醒める、釀す、お酌、酩酊など、お酒に関する漢字はほとんど酉の部首に属している。

実は「医」の旧字体である「醫」も下に酉の字画があり、やはり酉の部首に属している。酒と醫が同じ仲間である。酒を飲み過ぎたら醫者に診てもらえたと覚えておけばよい。字源

の解説によれば、略字の医には矢が含まれており、矢で射られた傷を酒のアルコールで消毒したのが医療行為の原点だから、醫には矢と酒が含まれている。因みに疾病の疾も、やましいだれに矢と書き、やはり矢が含まれている。戦闘で負傷した兵士を治すのが、医や疾の出発点と想像でき、戦争が引き金となつて医療技術が発達したと考えられる。

酒とは縁がなさそうな「醜」も酉の部首に属している。醜という字は、鬼の面を被った巫女が神前に酒を捧げる古代の儀式に由来する。鬼の恐い顔だけが強調されて「みにくい」という意味が生じ、主役を演じる酒が忘れられてしまった。

牛乳からバター、チーズを作る酪農の酪も酉の部首に属している。酒とは全く無縁と思われる食品だが、何故か酉を書く。時には理論的に説明できない漢字もある。

春たけなわや秋たけなわの「たけなわ」を「酣」と書く。酉と甘の組み合わせである。甘いを旨いと解釈すれば、酣は酒が旨い、つまり宴会が盛り上がり、酒を最も旨いと感じて飲む時間と解釈できる。「たけなわ」とは物事の最盛期を指す。宴会の幹事が終了を告げる際に「宴たけなわではござりますが……」と遠慮がちに切り出すのが慣例である。春や秋より宴と組み合わせるのが酣の本来の使い方と思われる。因みに和語の「たけなわ」は、宴半（うたげなかば）が訛つたとい

う語源説がある。漢字にも和語にも酒と密接な関連性が見出せる。

音読みと訓読み、唐音読み、国字、宛字読み、型破り読み、誤読みの慣用化、複数の訓読み、伸ばし読みと縮め読み、濁り読みと澄まし読み、語源の探求、部首の分類など、自己流の観点から漢字のグループを作つて、ささやかな考察を試みてみた。グループ毎に一覧表を作つておけば、今後文章を綴る際に大いに参考になると思われるるので、今後も多数の用例を集め続けたいと思っている。

論語に「子曰、知之者不如好之者、好之者不如樂之者」という言葉が載つてある。「之を知る者は之を好む者に如かず、之を好む者は之を楽しむ者に如かず」と読み下す。これを「知つてゐる」という人より、これが「好きだ」という人の方が優れている。これが「好きだ」というより、これを「楽しんでいる」という人の方が更に優れていると解釈できる。漢文の中でも特に気に入りの文章である。漢字を知つていると漢字が好きだというよりも、漢字の勉強を心の底から楽しんでいると主張できるのが望ましいと思っている。

最後に、私は楽しいと「感じ」ながら漢字の勉強に熱中している……というお粗末な馳洒落で締め括りたい。

# みずが島

らじうなるだろうかと、あなたが考えたから生まれた存在です

I 「分子と言うとずいぶん、想像もつかないほど小さい方ですね」

池田壽雄

2007年10月初めの3連休を利用して「みずが島」へ旅行した。この島では「水」についてのあらゆる知識を教えてくれる博物館があった。この博物館には、「水の精」と対話できるコーナーが用意されていた。水の精は54インチの薄型テレビに人の顔で現れた。男ともいえるし、女ともいえる妙な顔であった。こちらが女と思えば若い女性に見えだし、男かなと思った瞬間に若い男の顔に見えた。でも声は若い女性の声に聞こえたから、やはり若い女性だったかも知れない。

(W……水の精 I……池田壽雄)

I 「そうでしようね。毎日お世話になつてている方に、全く感謝どころか、当たり前と考えている人ばかりですからね。その気持は良く分かります。本当に人とは失礼な動物ですね」

W 「人の体には70%の水が含まれている」とすら知らない人間がいるのですからね。太ったとか、肥えたとかの原因は全部脂肪のためだと信じている人がいるのだから、失礼しちゃいますね」

I 「私は水の精です。初めまして。よろしくお願ひします」  
W 「いらっしゃらこそ。よろしくお願ひいたします。早速お尋ねしますが、いつたいあなたはどのような方ですか」  
W 「簡単に言えば、水の1個の分子に言葉をしゃべらせた

W 「おつしやる通りですね。水を飲まないでいるのがどんなに苦しいことか、知らない人ばかりになつていています。つい最近、滋賀県の比叡山の古いお寺の延暦寺で千日回峰行の荒行を達成した方がいますが、最後の9日間は食事をしない断食、水を飲まない断水、眠らない不眠で、お経を唱え続けたそうです。その間に体重は30%も減つて、生死の

境目を彷徨う状態になるそうですが、水を飲めないとどんなに苦しいのかそれすら知らない人が多いのですからね」

W 「文明が進んだ人間の世界では水道が発達して、喉が乾いたら水道の蛇口をひねれば欲しいだけ飲める状態になつていますから、その便利さが逆効果になつてているのではな

いでしょうか」

I 「その通りでしようね。ところで、一つあなたに質問して宜しいでしようか。あなたは一体どこから来られたのですか」

W 「1滴の水でも、それを構成する分子の一つ一つには遠い数十億年の過去があるのです」

I 「現在地上には約67億人の人が住んでいますが、生い立ちがそれぞれ異なるように、分子一つ一つの生い立ちが違うとおっしゃるのですね」

W 「その通りです。私が生まれたのは46億年前の原始地球です。その頃の地球は表面の全体が火山の火口のようにどうどろに溶けた溶岩で覆わされていました。私たち水の分子は全部、大気の中で水蒸気の状態で地球を覆つておりました。「大気」は「待機」と言葉が通じるでしよう。私たちは数億年間、雨になつて地上に降るのを待つていたのです。その間に仲間のかなりの量が宇宙空間に逃げてしまいましました。でも、私たち水が地球に大量残つたのは宇宙の奇跡と

されています。ほら、水星、金星、火星、土星、木星など地球以外の太陽の惑星にはほとんど水が残つていないのでしようが」

I 「水が地球に残つてくれたのが、どんなに地球に利益があつたのか、測りしれないですね。有難いことです」

W 「水平という言葉があるように、水は凸凹があるのを嫌います。強きをくじき、弱きを助けるとは、私たち水の仕事そのままで。地球の窪んだ所には、岩石や砂や泥で埋めます。また高い山脈では氷河によつて岩石を削り取ります。北米のロッキー山脈などは、出来て間もなくの頃には高さ8000メートルの山々が連なつていています。でも氷河によつて削られたから、今の高さになつていています。いずれは、ヒマラヤ山脈もまた同じような運命をたどる」とでしよう」

I 「ほう。そうだったのですか。それにしても、水の量は凄いですね。13億8000万キロ立方メートルもあるのですつてね。だから、地球の表面の3分の2は現在海で覆われているのですね」

W 「そうです。海水がその97%を占めているのは良く知られています。残りの3%が大気の中で水蒸気の状態だつたり、川や湖の水だつたり、地下水だつたりして存在しています。大気の水蒸気は雲になつて、地球の環境に大きな影

響を与えています。寒い地方を暖めたり、暑い地方を涼し

くしたりしているのも大気の水蒸気のおかげです」

I 「その上、見逃せないのは海流ですね。赤道直下で温められた暖流が北へ流れ、赤道から離れた地域も温めてくれていますね」

W 「もちろん、その通りです。逆に寒い地方で生まれた寒流が赤道の方向へ流れ、地球の温度を高すぎず低すぎずにするのに役立っています」

I 「本当に素晴らしい仕組みですね。太陽と地球との距離が1億5000万キロメートルだったことも、水の大部分を液体の状態で地上で保つのに役立っているのですね」

W 「太陽は毎秒9兆キロカロリーの100億倍の熱を発生していて、地球に届くのは42兆キロカロリーと推定されています。もし、太陽が発生する熱量がもつと大きかつたら、海水はみな干上がつていたでしょうし、少なすぎたら皆水の状態になっていたでしょう。この太陽の熱と地球との距離のバランスが絶妙であつたことも幸いだつたのではなかつたでしようか」

I 「本当に不思議ですね。これこそ神業とでも言うしかない現象ですね。その海水があつたからこそ、生物という生命体が地上に出現したのですね。ところで、あなたは原始地球の大気から雨となつて地上へ降つた後はどんな運命を

たどつたのですか」

W 「私は海へ雨となつて落下しました。その後蒸発して雲となり、パンゲア大陸という現在は地上に存在しない大陸に雨となつて降りました。山から川へさらに海へと流れ再び蒸発して大気となりました。それを数百回繰り返した後に南極に雪となつて降りました。それから数億年間の時間私は氷の状態で閉じ込められていました。でも、氷河の中に入り込み、ついに海の中に流れたのです。それからは海洋深層水として約20000年間の時間をかけて地球上をめぐりました。そうしてハワイの沖で海洋深層水を採取され、「マハロ」という商品名のミネラルウォーターとなりプラスチックの瓶詰めとなり、日本へ運ばれました。そして、今朝、10月25日にあなたが歟の後飲み込んだ少量の水の中に私が含まれていたのです。だから、現在の私はあなたの体のどこかに存在しているのです。でも明日の運命は私にも全く分かりません」

I 「46億年間」というと、途方もなく長い時間ですね。1万年でも十分長いのにその1万倍が1億年、そのまた46倍ですからね。それに比べれば人の一生なんて全く瞬間的な時間です。でも、人体に入つてからはずいぶんこせこせした動きだと思われたでしょう」

W 「あなたの体重は87kgですから、その70%だとして水

の重量は60・9kgですね。水の分子はH<sub>2</sub>Oと記載されま  
すね。つまり水の分子量は18ですから、水の1モルは0・  
018kgです。ということは、池田壽雄という人間に含ま  
れる水の量は、3383・3モルということになります。  
1モルの分子量は、専門的になりますが、アボガドロ定数、  
つまり $6 \cdot 023 \times 10^{23}$ 乗個となります。するとあなた  
の体に存在する水の分子の数は、 $6 \cdot 023 \times 338$   
 $3 \cdot 3 \times 10^{23}$ 乗乗となりますね。

つまり、 $2 \cdot 037 \times 10^{27}$ 乗乗個です。つまり20  
37万個の100億倍のそのまた100億倍の水の分子の  
数となります。

すると、心臓から押し出された血液は約25秒間で人体を  
1周しますから、丸1日間、人の体の中にいると約300  
0回ぐるぐると体の中を回ることになります。その間、必  
ずしも血液の中だけではなくて、組織間液だつたり、ある  
ときは細胞の中の細胞内液の場合もあります。胆汁の中に入  
ると小腸の中に分泌され、小腸で再び吸収されて、腸肝  
循環といいますが、ぐるぐるとそこで回る場合もあります。  
24時間いると、人の体の殆どの部分を巡ることになります。  
ですから、私はすでにあなたの大脑の中にも暫くはいまし  
たし、肝臓の中にもおりました。南極の氷の中に数億年間  
閉じ込められていたのに比べれば、それはそれは変化があ

つて、面白い時間でしたよ」

I 「そうですか。人の一生に比較すればあなたたちの水の  
運命は途方もなく数奇なものですね。あなたの仲間は、私の  
の体の中に2037万個の100億倍のそのまた100億  
倍の数だけいるのですから、それだけ異なった運命の水の  
分子がいることになりますね。とすると、地球の水のあら  
ゆる歴史が私一人の体の中に含まれていると理解していい  
ですね。

今、ふと思いついたのですが、人の身体は全て皮膚に覆  
われていますね。皮膚は「皮（かわ）」です。日本語では「か  
わ」は、「川」とか「河」に言葉が通じます。川には必ず岸  
がありますね。川の中身は水で、常に上流から下流に流れ  
ています。川岸は変化がありませんが、川の内容の方は常  
に変わっています。人間の皮を川岸と例えるならば、人間  
の体の70%を占める水は常に新しいものと変わっています。  
つまり川と原理は同じだと言えますね。

現在、地球上には約67億人の人間がいます。ということ  
は、地球上に67億本の川が流れているのだと想像もできま  
すね。消化管の始まりが口であり、終わりが肛門ですが、  
川の上流から下流とも例えられます。

現在の日本は食料の60%を外国から輸入しております。  
すると、日本人の身体を流れている水の60%は外国の水で

あると言えます。野菜や果物の90%から95%は水であることはご存知でしょう。

つまり日本人は見かけでは日本人だけど、中身の方はかなり外国人になっているのです。明治時代に「和魂洋才」と言われましたが、現在の日本人は「和魂洋体」ではないでしょうか？

W 「いいことに気がつかれましたね。それはおそらく真実でしよう。でも、気がついている人は殆どいないでしようね。ただ一つ川と人とは異なる点があります。上流の川の水と下流の水とでは内容において一切変化がありませんが、人体では違います。水は消化管から吸収されて血液の中に入ります。肝臓で代謝されて、水は糖、脂肪、たんぱく質などに変化します。つまり、またそれらは全く逆の変化で身体の末梢で分解されて水となる部分もあります。ほら、砂漠を進むラクダのこぶの中には中性脂肪がたくさん蓄えられていて、それらが利用されて代謝されるときに水が出来る。ラクダはその水を利用するから渴きに耐えられるのだという話を聞いたことがあるでしょう。これを「代謝水」と呼びます。でも、大きな流れとしては、水は口から入って肛門から大便として、あるいは外尿道口から尿として排泄されている事実は本当です」

I 「遠く2500年前の大昔にインドのお釈迦様（ゴーダ

マ・シッダールタ）は、『世の中の全てのものは変化する』と見抜かれたと言われていますが、科学が進歩した現代において、まさしくその通りだと証明されたのです。我々の人体でも、水ばかりではなく、有機物である炭化水素やたんぱく質や脂肪以外に、無機質であるカルシウム、マグネシウム、塩素なども全てが毎日変化してやまない状態なのです。すると、変化しないのは、『私の魂だけが自分である』という自意識だけとなるのでしょうか。死んだ後でその人の人骨のカルシウムだけを崇拜するのは、実は非科学的な風俗習慣だと断言できるでしょう。

流行歌の『千の風になつて』の歌詞は真実ですね。CDレコードが100万枚も売れるというヒット曲になつたのも納得がいきます。

今日は非常に興味深い話を聞かせていただきて本当にありがとうございました

